平成 27 年度 JACET 中国・四国支部
秋季研究大会プログラム＆発表要旨

日時：10月24日（土）12:15 ～ 受付

場所：松山大学（〒790-8578 愛媛県松山市文京町4－2）

研究発表：8号館4階　841教室・842教室

講　　演：8号館4階　844教室

12:15 ～　　受　付　(8号館4階)

司会　　三宅　美鈴（広島国際大学）

12:45 ～ 12:55　　開会式

開会の辞　　支部長　　松岡博信（安田女子大学）

挨拶　　松山大学大学院言語コミュニケーション研究科長

吉田美津（松山大学）

大会実行委員長　　寺嶋健史（松山大学）

（休憩　5 分）

13:00　～　17:50 研究発表（841教室　＆ 842教室）

第１室（８４１教室）　　司会：　岩井千秋

発表１：Assessing the English-language needs of medical professionals in Shikoku

（四国地方で活躍する医療従事者のニーズの解明）

（13:00－13:25）

Willey, Ian（香川大学　大学教育基盤センター）

発表２：OPP (Oral Presentation & Performance)イベントへの参加から得られた協働学習による教育効果－CLIL の視点を取り入れた海上保安大学校の場合－

（13:30－13:55）

二五義博（海上保安大学校）

発表３：マンガ教材を用いた世界諸英語への理解を深める英語教育

（14:00－14:25）

馬場洸志（追手門学院大学、教育開発機構）

（休憩：10 分）

司会：高橋俊章

発表４：Moodle と YASUDA　SYSTEM の融合による e ラーニング・システム

(14:35－15:00)

松岡博信（安田女子大学）

発表５：英語の分節に関する一考察－閉鎖音/t/を音節境界の前後に持つ例を中心に－

(15:05－15:30)

小川直義（松山大学）

発表６：日韓の中学校英語教科書における語彙およびリーダビリティ比較

(15:35－16:00)

李受娟（安田女子大学大学院）

第２室（８４２教室）　司会：　平本哲嗣

発表１： L1 意識化促進と L2 誤出力予防の相関性 －「できた」の英語翻訳を事例として－

(13:15－13:40)

西谷工平（就実大学）

中崎　崇（就実大学）

小田希望（就実大学）

発表２：特別支援学級での外国語活動：評価に関する一考察

(13:45－14:10)

中山　晃（愛媛大学英語教育センター）

発表３：言語活動におけるワーキングメモリの働きについてーリスニングとリーディングに焦点を当ててー

(14:15－14:35)

藤村美希（安田女子大学大学院）

（休憩：10 分）

司会：　堀部秀雄

発表４： 英語で教える英語の授業が学習者の教授言語の好みに与える影響

(14:45－15:10)

岩中貴裕（IPU 環太平洋大学）

発表５：小学校教員養成課程の 2 年生と 3 年生の英語活動に関する意識調査

(15:15－15:40)

田辺尚子（安田女子大学）

発表６：英語指導力の高い小学校教員養成―短期集中講座における実践－

(15:35－16:00)

江原智子（環太平洋大学）

講演（844 教室） (16:05－17:35)

司会：寺嶋健史

演題「動機づけ研究の観点から英語の学習指導を考える」

廣森友人（明治大学）

17:40 ～ 17:50　　閉会式

閉会の辞　　副支部長　岩井千秋（広島市立大学）

18:30 ～

懇親会：てまり（愛媛県松山市一番町 2－5－14　丸菱ビル 1 階 ☎089-934-6624）

会　費：4,000 円

研究発表　要旨

第１室（８４１教室）

発表１：Assessing the English-language needs of medical professionals in Shikoku （四国地方で活躍する医療従事者のニーズの解明）

発表者：Willey, Ian（香川大学　大学教育基盤センター）

It has long been asserted that medical professionals in Japan need English skills. However, needs analyses of medical professionals in Japan has not been sufficiently conducted. The presenter will describe a mixed-methods research project aiming to reveal the English needs of medical professionals in Shikoku. First, a bi-weekly series of conferences conducted in English among a group of surgeons at a local hospital, which the presenter was invited to attend as an English advisor, will be described. Over one year, the presenter observed these doctors' actual English practices and needs, following ethnographic studies of scientists (e.g., Bazerman, 1988). These doctors often lacked basic presentation and pragmatic skills; this lack was more problematic than a lack of medical English knowledge. Second, the presenter will introduce

a recently-launched study, funded by MEXT, which will use questionnaires and interviews to reveal how doctors and nurses in Shikoku use English and think about English education. A questionnaire was piloted by 46 doctors and nurses in Kagawa prefecture. Results indicate that participants are largely unsatisfied with their university English education, but feel a clear need for English and some stress in having to use English. The majority expressed a need for more English speaking practice at university. The presenter will conclude by stressing the importance of needs-based curricula and general English education for students with scientific majors.

発表２： OPP (Oral Presentation & Performance)イベントへの参加から得られた協働学習による教育効果－CLIL の視点を取り入れた海上保安大学校の場合－

発表者：二五義博（海上保安大学校）

JACET 中国・四国支部では、2009 年度より、大学間が連携して英語での口頭発表やパフォーマンスを行う OPP（Oral Presentation & Performance）イベントが毎年 12 月に開催されてきた。これには、教師側としてはオーラル・イングリッシュの指導技能の向上と教員間の情報共有、学習者側からはオーセンティックな発表の場を通じた学習者同士の連携と日常の学習活動への活用という二重の目的がある。海上保安大学校はこの OPP イベントに 2011 年度より過去４回（発表者が指導を始めてからは３回）参加し、主に英語での大学紹介や、視覚や身体を利用した海上保安業務の実演を行ってきた。

本発表の目的は、海上保安大学校の過去３回の OPP への取り組みを紹介しながら、特に CLIL の視点を取り入れた 2014 年度の事例に焦点を当て、CLIL の４つの軸でもある「言語」「内容」「思考」「協学」の側面からどのような教育効果があったかを明らかにすることである。まず、理論的背景として、OPP 活動で重要な意味合いを持つ協働学習に加え、ヨーロッパの CLIL についても触れる。次に、実践面としては、「言語」では海事英語の習得、「内容」では警備や救難等のオーセンティックなテーマ、「思考」ではクイズ形式など考える活動、「協学」では準備段階や発表当日の学び合いを中心に検討する。最後に、学生の反応については、大学間の OPP 活動全体の調査結果を踏まえながら、本校が独自に行った聞き取り調査の自由記述も入れて総合的にデータの分析を行う。

発表３： マンガ教材を用いた世界諸英語への理解を深める英語教育

発表者：馬場洸志（追手門学院大学、教育開発機構）

研究の目的は、World Englishes の概念をマンガ教材化し、その教材を活用することで英語の多様性や日本訛りの英語に対する意識の変化、英語の学習動機の向上が英語学習者に表れるかどうかを検証することである。　World Englishes を英語教育に導入することで、英語の多様性への

気づきが促され、日本訛りの英語を受け入れる態度の変化も生まれ、英語学習動機の向上にも繋がることが明らかにされている（Brown, 2009）（佐藤, 2012）。よって World Englishes の概念をマンガ教材化し、その教材を活用することによっても同様の結果が得られるのではないかということが本研究の仮説である。なぜマンガ教材かという点に関して、World Englishes の概念をマンガ教材化するという前例がないということに加え、教材としてマンガを用いることの有用性が明らかにされているからである（吉田, 2013）。

研究方法として、現在制作中であるマンガ教材を完成させ、研究仲間の協力を得ながら、某高校の学期開始前に(1)World Englishes としての英語への意識、(2)自らの英語への自信、(3)英語学習への態度といった観点からアンケートを行う。そして製作中のマンガ教材を読んでもらい、１ヶ月ほど時間を置いて再度同様のアンケートを行い、それぞれの項目の変化を検証する流れとなっている。マンガ教材がまだ制作途中であり、検証実験の段階まで到達できていないため、結論はでていないが、発表などを通して改善点を見つけ修正しながら仮説を検証していきたいと考えている。

発表４：Moodle と YASUDA　SYSTEM の融合による e ラーニング・システム

発表者：松岡博信（安田女子大学）

安田女子大学の CALL 教室における e ラーニングの授業実践について報告する。本学では約８年前から CMS (Coures Management System) である Moodle を本学教員が共同開発した YASUDA SYSTEM（「サッと英作！」、「サッと選択！」、KED システム）とを融合させた e ラーニングによる英検および TOEIC を目指した演習形式の授業を CALL 教室において行って来た。　Moodle の機能としては、数種類の小テスト作成機能を用いる。これらは主に、TOEIC の Listening や Reading の多肢選択問題作成こ使用し、Listening では、MP3 形式の音声メディアを問題に埋め込んで Moodle の Flash Player で再生を行う。授業の最後の Dictation 演習までに比較的早く解答を終了した学生のためには、「サッと英作！」および「サッと選択！」を用いた十分な量の英作文、語彙・文法の課題に取り組ませる。KED システムを用いた Dictation 演習は実に 25 分間にも及ぶものであるが、学生は集中力を持続し、熱心に取り組んでいる。

最後に Dictation のスクリプトを渡して解説するとともに、次回への復習テストの課題とする。この復習テストの実施方法もユニークなものであり、発表当日にその仕組みを詳しく解説したい。

発表５：英語の分節に関する一考察－閉鎖音/t/を音節境界の前後に持つ例を中心に－

発表者：小川直義（松山大学）

英語の音節がいくつあるかを当てるのはそれほど困難なことではない。しかし、音節がどこで区分されるか、すなわち分節に関しては、学者・辞書間でしばしば意見が分かれ、必ずしも容易

なことではない。その理由のひとつは、分節には音素配列論、音韻論、音声学、音響学などが複雑に関係するため、解釈が分かれることである。そこで、本発表では、まず閉鎖音 /t/ を音節境界の前後に持つ例を中心に分節の問題点を提示し、次にそれらを解決する方法について考察する。

発表６：日韓の中学校英語教科書における語彙およびリーダビィティ比較

発表者：李受娟（安田女子大学大学院）

韓国と日本の現行のそれぞれ２種類の中学校英語教科書１２冊を、語彙とリーダビリティに焦点を当てて比較、考察した。調査対象として、全教科書の各ユニットの本文テキストのみを使用した。そのテキストデータから、総語数、異語数、特徴語、リーダビリティを調査、分析した。語彙密度の比較にはTTRとR値を、リーダビリティの比較には「英文 Readability 測定プログラム（新教科書対応）」（小篠敏明・福井正康， 2015）を用い、Fresch ReadingEase、Fresch-Kincaid Grade Level、Sentence Difficulty をそれぞれ算出して比較した。また特徴語の比較には WordSmith の Keyness を使用した。

詳細な分析結果については、当日発表する。

第２室（８４２教室）

発表１： L1 意識化促進と L2 誤出力予防の相関性 －「できた」の英語翻訳を事例として－

発表者：西谷工平（就実大学）

中崎　崇（就実大学）

小田希望（就実大学）

本研究の目的は，L1 語彙の多義性の指導が L2 翻訳対応語彙への翻訳エラーの予防にどの程度まで有効なのかを検証することにある。とくに本研究では「できた」の英語翻訳に焦点を当てる。というのも，できた」は文脈次第で“could”にも“was/were able to”にも翻訳され得るという点で「形式的翻訳曖昧性」（Degani & Tokowicz, 2010）を内在しており，そのことがしばしば学習者の翻訳エラーを引き起こすからである。西谷・小田（2015）はその曖昧性を解消すること，すなわちL1語彙の多義性を指導することが，当該のエラー予防にどこまで有効なのかを検証した。結果として，指導の有効性を示唆するデータを得ることができたものの，その実験手法にはさまざまな問題点があった。そこで本研究は「翻訳曖昧性の改訂階層モデル」（Eddington & Tokowicz, 2013）を基盤として，「できた」と“could”および“was/were able to”との意味的相関性（西谷・中?, 2015）を学習者に指導することで，当該のエラーをどの程度まで予防することができるのかを再検証した。結果として，指導の有効性を確認することができた一方で，指導面で検討すべき課題も明らかになった。本発表では，以上の概要について論じる。

発表２：特別支援学級での外国語活動：評価に関する一考察

発表者：中山　晃（愛媛大学英語教育センター）

近年、特別な教育的支援を必要とする児童・生徒への外国語活動の実践研究とその報告は、比較的活発に行われるようになってきた。一方で、平成３２年度からの小学校での英語科の教科化を見据え、新たな視点での外国語活動の在り方や、評価方法についての議論が現場レベルでは、話題になり始めている。そこで、本事例研究では、中学校や高等支援学校等で、すでに教科化されている英語の評価方法を取り上げ、その評価法を考慮した上で、小学校段階での評価の在り方について、その方向性と可能性（例えば、ルーブリックの作成や個別の支援計画に沿った Can-Do の設定など）について、個別の事例をあげながら提案する。

発表３：言語活動におけるワーキングメモリの働きについてーリスニングとリーディングに焦点を当ててー

発表者：藤村美希（安田女子大学大学院）

言語のワーキングメモリは、その主たる働きとして「処理」と「保持」の機能を持っている。しかし、第２言語運用において、それらの機能は母語におけるものとどのよう異なってくるのだろうか。以上のことを踏まえて本発表においては、言語のワーキングメモリが第２言語学習者の言語運用においてどのような機能を果たすのかを考察する。先ず、先行研究におけるワーキングメモリの定義や機能に関する議論を概観して、それらを整理する。そして、それをもとに Baddeley(2007)のワーキングメモリの概念モデル図を発展させ、特に L2 リーディングおよびリスニング活動におけるワーキングメモリの関与について論じる。

発表４：　英語で教える英語の授業が学習者の教授言語の好みに与える影響

発表者：岩中貴裕（IPU 環太平洋大学）

平成 25 年度に高等学校では新しい学習指導要領が施行され、基本的に「英語の授業は英語で」教えることになった。この変更は大学における英語教育にも大きな影響を与えると考えられる。発表者らは平成 26 年度より、1）高等学校で英語の授業を英語で行うことがどの程度実践されているのか、2）英語を英語で教えることや日本語を併用することに対する学習者の意識にどのような変化が生じるのか、3）英語を英語で教えるために何が必要であるのか、を明らかにするためのプロジェクトに着手した。

本研究では、発表者が平成 26 年度に「主として英語を用いて行った授業」の実践報告を行い、以下の２つの問いに答える。

(1)教師の授業における英語使用は学習者の教授言語に対する好みにどのように影響を与えるのか。
(2)学習者の英語力は教授言語に対する好みにどのように影響を与えるのか。

調査参加者は英語を専攻としない 43 名の学部学生である。調査参加者の TOEIC-IP の平均点は 410.45（SD = 94.04）であった。５月と７月にアンケートを実施し、調査参加者の教授言語に対する好みがどのように変化するのかを明らかにすることを試みた。その分析結果の報告を行う。

発表５：小学校教員養成課程の 2 年生と 3 年生の英語活動に関する意識調査

発表者：田辺尚子（安田女子大学）

本発表は、小学校教員養成課程の 2 年生と 3 年生を対象として 5 月に実施した小学校外国語活動（本研究では英語活動に限定）に関する意識調査の結果を報告し、大学での小学校教員養成の在り方について示唆を与えることを目的とする。

本調査は、筆者の所属する学科が文部科学省の「平成 27 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業」の委託を受け、「小学校での英語教育に対応できる英語運用能力の育成のためのカリキュラム開発」を調査研究主題として 1 年間取り組んでいる中での事前調査の意味合いをもつ。研究対象となる 2 年生 55 名と 3 年生 60 名は 2020 年度からの小学校英語教育の改革、すなわち高学年での教科化と中学年での外国語活動の必修化について昨年度知らされており、ある程度の当事者意識をもっていると考えられる。意識調査の内容は、小学校英語活動への印象、英語活動の実践に必要だと考える能力・資質、英語活動の実践のために大学で学びたいことの 3 つの観点について 5 段階評価と自由記述による質問紙調査を実施した。先行研究としては、名畑目（2014）が初等教育を専攻する大学 1 年生を対象として同様の調査を行っているが、本調査は 2 年生と 3 年生を対象としている点と、英語熟達度テストとして TOEIC 模擬を同時に実施して質問紙への回答と英語力との関係性を探ろうとしている点において意義がある。結果については、発表当日詳述する。

発表６：英語指導力の高い小学校教員養成―短期集中講座における実践－

発表者：江原智子（環太平洋大学）

本発表は講演者の所属する大学における小学校外国語活動の関連講座の実践報告である。本学では小学校教員を志望する学生に向けた選択必修の「小学校外国語活動の指導法」という授業が 3 年次後期に配当されるが、教育実習時期までに小学校の英語教育関連の知識及び指導力を養成する機会は未だ乏しい。2020 年に全面実施予定の 5・6 年生での英語の教科化や 3 年生からの早期開始等の決定を受け、現状での学校教員養成課程外で実践可能な取り組みとして、夏の集中講座として考案し、2 年継続して開講した。対象は 3 年生有志の学生（1 年目 20 名、2 年目 11 名）

で、どちらも 3 日間の集中プログラムである。受講者の既存の英語力は英検で 5 級レベルから 2 級レベルまで多岐に及び、講座前後の英検問題を援用したテストで英語力の伸長を検証し、また事前事後アンケートや毎日の省察シートを用いて、英語指導における課題の発見や動機づけ変遷の検証も試みた。同時に、1 年目の受講者には、質的なインタビューから経年的な意識の変遷や、回想的に講座の課題や是非を問うた。教員採用試験を既に経験しており、今後、同様の講座提供の意義を考える上で貴重な意見と考えられる。

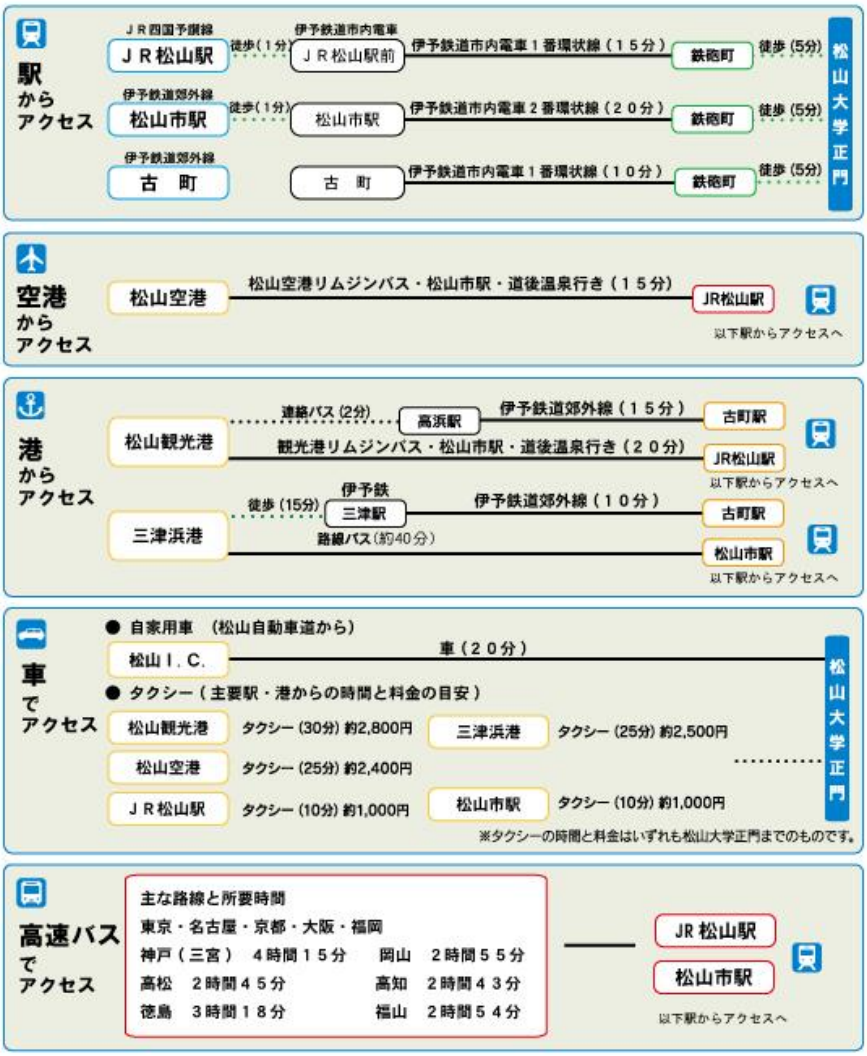
講演　要旨

演題：「動機づけ研究の観点から英語の学習指導を考える」

講演者：廣森友人（明治大学）

英語学習の成功や失敗に影響を与える要因は数多く存在する。なかでも，「動機づけ」は重要な位置づけを占めており，効果的な指導を展開する上ではとりわけ考慮すべき要因だと考えられている。では，動機づけという心理的な概念に対して，私たちは具体的なイメージを共有できているだろうか。動機づけが高い・低い，あるいは動機づけを高めるといった場合には，そもそも動機づけとは何かといった理解が不可欠なはずである。本講演では，動機づけの中身を簡単に確認した上で，どんな特徴を持つ学習者が高い動機づけを維持する傾向にあるのか，学習者を動機づけるにはどのような方略があるのかについて，理論と実践の両面から考えていきたい。

松山大学アクセス


駅
から
アクセス
ＪＲ四国予讃線
ＪＲ松山駅
徒歩（１分）
伊予鉄道市内電車
ＪＲ松山駅前
伊予鉄道市内電車１番環状線（１５分）
鉄砲町
徒歩（5分）
伊予鉄道郊外線
松山市駅
徒歩（１分）
松山市駅
伊予鉄道市内電車２番環状線（２０分）
鉄砲町
徒歩（5分）
伊予鉄道郊外線
古　町
古　町
伊予鉄道市内電車１番環状線（１０分）
鉄砲町
徒歩（5分）
松山大学正門
空港
から
アクセス
松山空港
松山空港リムジンバス・松山市駅・道後温泉行き（１５分）
JR松山駅
以下駅からアクセスへ
港
から
アクセス
松山観光港
連絡バス（2分）
高浜駅
伊予鉄道郊外線（１５分）
古町駅
観光港リムジンバス・松山市駅・道後温泉行き（２０分）
JR松山駅
以下駅からアクセスへ
三津浜港
徒歩（15分）
伊予鉄
三津駅
伊予鉄道郊外線（１０分）
古町駅
路線バス（約40分）
松山市駅
以下駅からアクセスへ
車
で
アクセス
● 自家用車　（松山自動車道から）
松山Ｉ．Ｃ．
車（２０分）
● タクシー（主要駅・港からの時間と料金の目安）
松山観光港
タクシー（30分）約2,800円
三津浜港
タクシー（25分）約2,500円
松山空港
タクシー（25分）約2,400円
ＪＲ松山駅
タクシー（10分）約1,000円
松山市駅
タクシー（10分）約1,000円
松山大学正門
※タクシーの時間と料金はいずれも松山大学正門までのものです。
高速バス
で
アクセス
主な路線と所要時間
東京・名古屋・京都・大阪・福岡
神戸（三宮）　４時間１５分　岡山　２時間５５分
高松　２時間４５分　高知　２時間４３分
徳島　３時間１８分　福山　２時間５４分
JR 松山駅
松山市駅
以下駅からアクセスへ